2023 年 7 月号

Community & Friend

有限会社アルファー
大阪府高槻市氷室町 4-13-3
吉田 清一郎

過去の月間通信は https://www.alphar-net.com/monthlymail.htm

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 7 月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。

Where is my "KOKORO" located in the body ?

Nowhere in the body.

Just an energy,
That comes from outside.

Goes through all over the body,
and exits.

三重県に『熊野大社』というところがある。15 年程前、さとうファームの佐藤修三さんから『吉田さん、暇だろう。熊野三山を巡る旅に付き合ってよ』と誘われた。暇かどうかはさておき、断る理由も無いのでお付き合いした。案内人は生体システム実践研究会の和歌山支部長の島田さんだった。

1 泊 2 日で熊野大社、那智大社、速玉大社を総勢 5 人で周る企画。生体エネルギーのグループなので、それなりに期待を膨らませていた。最初の訪問地が熊野大社だった。ところが建物は立派なのだが、ひどくつまらなくて手を合わせる気にもならない。まったく、困ってしまった。島田さんの会社の専務も同行されていたので、率直に『何も感じない』と呟いた。そうすると専務曰く、『此処は水害にあった後、移転したところ』『元々の場所は道路の向うの河原付近にあって、今は鳥居だけが残っている』だった。これで謎が解けた。『なんだ、早く言ってよ』と興奮が蘇り、失礼ながら、その様に言って、早速みんなを置き去りにして、ひとりサッサと其処を後にして下り、道路に出ると、土産物屋が並ぶ向こう、隅の駐車場の端に下に降りられる階段が見えた。その階段まで来ると、そこから遠目に画像の鳥居を見渡せた。

見えたのは鳥居だけではない。その背後にある山波まで一望できた。その場でその山波に釘付けになった。というのは、その背景の山波からすごいエネルギーが出ていた。信じないだろうが、『**ヴィイ～ン**』『**ヴィ～ン**』という音がこだましていた。

唖然とした。

『ヴィ～ン』という音は、大友克洋が書いた『アキラ』という漫画に出て来た表現だ。やっぱり信じないだろうが、この音が耳に聞こえた訳ではなく、目に聞こえた。鳥居はこのエネルギー波の入り口という事に思えた。なのでその鉄の階段を降りる。降りると、画像の一直線に伸びる田の畔道というか、参道というべきか、その道に降り立つことが出来た。正面の道を呆気に取られ乍ら一歩ずつ進む。途中、この道から逸れてみるとドウナルノダロウと悪戯心が湧き出て、右の田に降りてみた。

エネルギーに角度と云うものは存在しないのか、湧き出ている力は何も変わらなかった。そんな事をしてい

ると、後ろから島田さんが白いバンで遣って来て、『みんなは？』と聞いた。自分は『知らない』と素っ気なく応えた。自分のなかには誰も存在していなかった。

いよいよ鳥居をくぐる。くぐるのだが、この鳥居に憑依されていることしばし、くぐれない。存在感はあるが結局この鳥居には、影響を受けているだけで何も核となるものは無かった。だからくぐることにした。ふと顔を上げ、前方を見ると島田さんが何やら下を見ながら、手のひらを地面に向けてウロウロしている姿が目に入った。何か大切なものを落として探しているような気がした。探し物を踏みつけてはいけないと思い、そこを迂回して奥に何やら建造物らしきものがあるので、そこに何かあるのかと進む。

そうすると、あら不思議、いったい何分の間の出来事だったか分からないが、あれほど詰まっていた気がフェードアウトして行った。という事は、この奥には何も無いということになり、急に拍子抜けしてしまった。

仕方が無いので戻り、探し物が見つかったのか、すっかりリラックスして立っていた島田さんに向かって、『突き抜けてしまったようだ、奥には何も無い』と告げた。そうすると彼は『さすがですね』『これがミナモトですよ』と、地面に少し出ている、そう親指と人差し指で作る輪っかの大きさの石を示した。視線を移すと、なるほど何か存在感はある。あるが拍子が抜けてしまっていて、もうあの気は戻って来なくて、近くに置かれているベンチに腰を落とした。

その夜、御飯を食べている時向かいに座っていた島田さんに、『そもそもあの石は、最初どうして見つけることが出来たのですか』と訊ねた。応えは、知り合った臨死体験の時間の長さの記録を持っている方から、その石の存在を知らされたとのことだった。

そんな記録があるのも知らないし、長さを比べる事も知らない。ただ、昔訊ねた北海道のパプリカの農家のところに来ていた人が、私の顔を見るなり自分の臨死体験の話しを始めた。何でもその農家は、その人と何年も付き合っているが、そんな話しは今まで聞いたことがないと言っていた。話しは微に入り細に入り、何処かで聞いたり、読んだことがあったような内容だったので、特に気が動くこともなく『ああそうですか』『大変でしたね』と済ませてしまったが、これは余談。

今は、人が人を支配するための宗教や、money ですっかり忙しい日々を送っているが、役行者よりもっと、もっと前、天体の運行と共に暮らしていた時代、こういうエネルギーの重要さを、ひとは大切にしていたのだろう。ひとが人であるために。

今秋もまた米国視察の旅に出る事になっているのだが、いつも、どこに行っても、その場に溶け込むように馴染んでいる自分の姿をみんなが不思議がってくれるが、もちろん自分の姿は見えないのでよく分からない。ただ何処に行ってもその場のエネルギーが自分の中に入って来ては外に流れ出て行く。無意識にそのエネルギーと一体になっている。一時期、懸命にしていた般若心経の写経は、身体に入って来たエネルギーが自分の中で凝り固まってしまう、そのエネルギーを 276 文字の漢字を半紙に写す作業に依って半紙に移し、移してもその場に置いていると、また自分に返ってくるので燃やしたり、土に埋めたり、水に流したりして自然に還す。これは墨を硯で磨らなければ効果は無い。

つまり、墨を磨ることは炭素 C と水素 H と酸素 O を混ぜること。作物を育てる上で大切な要素もこの三つの元素が基本となる。そもそも生命の宿る場所は三次元なので、元素番号 6 の炭素がイノチの生みの親だと言われる所以だ。それまで別々に存在していた、写経と美味しい作物を売る所業が、ある瞬間にこの共通点に気が付き、胸が震えたことがある。

さて、冒頭の英語だが、オレゴンの稔子さんに『こころ』は如何翻訳すれば良いのかと聞いた。結論ではないだろうが、EMOTION が最も近いのではないかという答えだった。確かにそうかも知れない。だけどひょっとすると『鮨』のようにいずれ『こころ』は **KOKORO** のまま世界に通じる概念になるかも知れないと思う。消化器官を外に持つ植物のように、動植物ともに心は外に持っているのではないだろうか。

有限会社アルファー：吉田清一郎